

葛飾区史編さんだより

260826

Vol.1

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 26 年 6 月 28 日 土曜日 午後 2 時から、亀有地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。

多くの方にご参加いただき、亀有にまつわる様々なお話を伺うことができました。



貉塚(むじなづか)

江戸時代の亀有は、旧水戸街道にそって家々が並び、大正時代には茶店やざる屋、馬蹄屋、傘屋などの商店がありました。現在、新宿にある亀有警察署も大正 13 年(1924)に寺島警察亀有分署として現在の亀有二丁目に設置されました。

亀有の町が大きく変わっていくのは明治 30 年(1897)、現在の常磐線亀有駅が開業してからです。明治時代、鉄道が敷設され、駅ができることは必ずしも歓迎されませんでした。しかし、亀有では地元の篤志家が町の発展のために自らの土地を提供し駅の開設を誘致したそうです。

亀有五丁目の見性寺にある「貉塚」に関する伝説は、亀有の町にとって画期的だった鉄道開設に関わる話です。まだ、常磐線が開通したばかりのころ、道の線路に毎晩、毎晩、美女が現れては消えて列車の運転手の心胆を寒からしめていました。思いあぐねた運転手たちは、試みにそのまま列車を走らせてみることにしました。すると翌朝、狸の死骸が線路に転がっていました。その狸を供養したのが貉塚です。

これに類する話は京成線沿線や、ほかの地域にも残っています。鉄道という近代を象徴するものと、「人を化かす狸」という前近代を象徴するものとのせめぎあい語る伝説です。

日立亀有工場

昭和に入ると、日立製作所亀有工場、日本紙業亀有工場、井関農機大谷田工場などに勤める人たちが亀有駅で乗降するようになり、亀有駅の周辺は繁華街となりました。その中でも昭和 12 年(1937)に開業した日立製作所亀有工場(以下日立)は亀有の町の発展に大きく貢献しました。

映画館にも「日立館」、銭湯にも「日立湯」という名前がつけられていたものがありました。

この日立は、戦時中軍需工場として戦車や戦闘機の部品などを作っていました。そのため大勢の民間人が動員され、そのなかにはまだ十代の学生たちもいました。当時東京第二師範学校の生徒だった西村清さん(東立石四丁目在住)も動員された一人でした。

西村さんは昭和 19 年(1944)6 月から昭和 20 年 7 月まで日立に勤めていて、飛行機の車軸を作る仕事に携わっていました。作業所にはときおり海軍の士官がやってきて、「しっかりした軸を作ってくれ」と激励されていたので海軍の戦闘機零戦のものだったようです。

鋳型の中に流し込まれた鋼材がその車軸で、西村さんはドリルでその冷えた鋳型の砂を崩して車軸を取り出す仕事をしていました。一年余りに亘って学校に行くこともなく日立で、その作業を続けていました。当時は、立石の家から日立を往復するだけで亀有の町などを見る余裕はなかったという西村さんは、「当時亀有駅はホームが 2 本あって陸橋で渡されていました。そこから立石方面が空襲されているのを見て、家も焼けちゃったのかな、と心細い思いをしました」と語ります。

亀有駅北口の戦後



昭和 20 年代の亀有には南口しかなく、現在の北口側に行くには駅から少し離れた場所から線路を渡って行きました。北口側には日立製作所亀有工場などがありました。

8 のつく日には見性寺の縁日があって露店商がひしめき、亀有公園ではときおり演芸会や相撲大会などの催しが開かれました。戦時中は出征兵士を送る壮行会も行われるなど、亀有公園は地域の人たちの結集の拠点でした。また、日立の計らいで街頭テレビが設置されてプロレスなどを放映していました。

現在の環状七号線はまだ青戸に抜けていなくて、広場のようになっていました。ラジオ体操をやったり、子供が野球をやったりしていました。また、亀有北口側には戦災で焼け出された芸人が移り住んだ「芸能荘」と呼ばれるアパートがあり、まだ売り出し中の芸人が住んでいました。マジックの伊藤一葉さん、ゼンジー北京さんなどのちにスターになった人もいて、あまり大きくない部屋に大勢住んでいたことや、すぐ近くのどぶに面した居酒屋で、もっきりというコップ酒を飲んでいる様子が町の人たちに記憶されています。亀有に住んでいた芸人は多く、昭和 40 年代に「デン助劇場」で一世を風靡した大宮敏光(のちに敏充と改名)さんや宇津宮雅代さんなどがいたそうです。

亀有香取神社の祭



亀有香取神社は建治 2 年(1276)創建と伝えられる古社です。江戸時代は祭礼の時に人形芝居も上演されていました。いわゆる村の鎮守です。西亀有には高木神社があって旧砂原村の人たちでお祭りされています。

香取神社には大きな神輿があって、それを町内会順送りに渡御する祭りがよく知られています。

神輿を担ぐ会を雷電といいます。かつては神輿の順送りのときに、勢い余って神輿を壊してしまうことがよくあり、一時期神輿の巡業を中止していました。それを復活したときにできたのが雷電で、江戸時代の名力士の名にちなんだ粋で力強い名前です。

平成 26 年は本祭りで、よりいっそうにぎやかなお祭りになることが期待されます。香取神社は年間を通じてさまざまな行事があり、崇敬会のみなさんによって盛り立てられています。

亀有の水道

大正 15 年(1926)、金町浄水場が開設され、東京都心に飲み水が供給されるようになりました。しかし浄水場の地元である葛飾区域は、まだ農村地帯で水道の恩恵を受けることがありませんでした。すでに都市化が進みだし、多くの人々が住むようになりつつあった亀有ではぜひ上水道がほしいところでした。本宮宏さん(亀有三丁目在住)の祖父甲子三さんは、当時内務省から東京市に派遣された水道技師でした。大正 13 年から亀有に住んでいましたが、亀有の発展のためにぜひ水道が必要だと考えました。昭和 5 年(1930)には当時の亀青町(現在の亀有・青戸の一部)の町会議員にも当選し、水道の敷設の陳情を東京市に熱心に働きかけました。



この陳情が実を結び、まだ上水道を設置する人口の基準に達していない亀有にいち早く水道を誘致しました。のちの亀有銀座商店街となる改正道路も昭和 5 年に作られ、その工事の様子が絵葉書となって現在に伝わっています。